

Title	国際結婚における経済的依存：ロシア人女性とアメリカ人男性の結婚を一例として
Author(s)	キム, ヴィクトリア
Citation	年報人間科学. 2008, 29-2, p. 109-113
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/5933
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

◇書評◇

国際結婚における経済的依存

—ロシア人女性とアメリカ人男性の結婚を一例として

Economic Dependence in International Marriage: The Case of Marriages between Russian Women and American Men

**Lynn Visson, *Wedded Strangers: The Challenges of
Russian-American marriages***

Hippocrene Books (New York), 2001

キム・ヴィクトリア

一九九一年にソ連邦が崩壊した。それによって、多くの旧ソ連諸国が民主主義化し、旧ソ連の人々は海外へ自由に行けるようになった。旧ソ連諸国は一九九一年に CIS (Commonwealth of Independent States、独立国家共同体) となったが、様々な政治的、経済的、社会的な問題が山積し、多くの人々が海外への移住を目指した。移住者の中には外国人と結婚し、外国に住むことを決めた人々もいる。現在では、移住の波は弱まったにもかかわらず、国際結婚をする CIS 諸国の人々は少なくない。とりわけ、女性の場合、その可能性が高くなる。例えば、ロシアニュース・情報局 (Russian News and Information Agency) によると、モスクワでは二〇〇五〜二〇〇六年に、あわせて二八〇五人の女性が外国人男性と結婚したという (RIA Novosti, 2007)。そして、二〇〇六年に九三カ国の男性がモスクワの女性と結婚する目的でモスクワにやってきた。それに加えて、カザフスタンで発行されている新聞によると、一九九二年からの十年間で、CIS 諸国出身女性、約七万五千人が「婚約ビザ (france visa)」^[1] でアメリカへ出国したと「Kazakhstan Today, 2003」。

以下で紹介する *Wedded Strangers: The Challenges of Russian-American Marriages* (おそ者との結婚—ロシア人とアメリカ人の結婚の挑戦) という本は、一九二〇年代から二〇〇〇年の期間にわたる、アメリカ人とソ連人 (又はロシア人) の結婚についての様々なライフヒストリーを記述したものである。

本書を執筆するために、著者、L・ヴィッソン (Lynn Visson)

はアメリカとロシアに住む数百人のミックスト・カップル（国際結婚をしたカップル）に、アメリカとロシアでインタビュー調査を实
行した。被調査者は、著者の友人及び友人を通して知り合った両国
に住むカップルである。これに加え、著者はロシア人又はアメリカ
人との結婚経験について、一般書籍や自叙伝のドキュメント分析、
さらに、それらの著者、作者達とのインタビューも行っている。

Wedded Strangers の初版が出版されたのは一九九八年である。そ
れ以降、著者と出版社には両国の多くのミックスト・カップルから
コメントや質問が寄せられた。また、一九九九年にロシア語の訳で
出版された本書も様々な論議をよび起した。それによって、本書は
内容を拡充して、二〇〇一年に再び出版された。具体的には、デー
ト・エージェンシーとインターネットを通じて結ばれたカップルの
経験、アメリカとロシアとを往復しながら生活することを決心した
若いカップルの物語、カップルの子ども達についての三つの章が加
えられている。

それでは、次に本書の内容を紹介する。本書は九章から構成され
ている。

冷戦の時代における国際結婚を比喩的に章題にした「*Breaking the
Ice*（氷を割る）」という第一章では、主にロシア人・アメリカ人結
婚カップルの歴史（一九二〇年～一九九〇年）が語られている。本
章では、一九九〇年代までソ連で国際結婚が少なかった理由を説明
している。最も大きな理由は、ソ連の政府が国際結婚を弾圧し、禁
止していたからである。このような背景があったからこそ、ソ連邦

崩壊後、民主主義化が生じ、旧ソ連人と外国人との結婚が増加し始
めたといえる。

続いて、第二章、「*Finding a Spouse*（配偶者探し）」及び第三章
の「*Couples*（カップル）」には、二〇年代から冷戦が終わる時代に
かけて結婚したカップルの出会いの方法、結婚する理由及びカッ
ルのライフストーリーが記述されている。第二章ではアメリカ人男
性とロシア人女性の結婚する理由が興味深い。アメリカ人男性にとっ
て、ロシア人女性は女らしく、「妻の伝統的な役割を果たす意欲が
ある」(p.52)。一方、ロシア人女性は、アメリカ人男性が礼儀正し
く、勤勉であるため、自分がケアされていると感じる。つまり、国
際結婚において、伝統的なジェンダーの規範が重要な役割を果たし
ているのである。

そして、「*Adapting*（適応）」という四章では、カップルの中でア
メリカからロシアへ、また、ロシアからアメリカへ移住した人々の
経験について語られている。アメリカの生活のスタイル、生活習慣、
人々のコミュニケーションスタイルのギャップによって、ロシア人
は膨大な数の問題に遭っていた。そのようなコミュニケーションの
中で最も大きな問題が英語とロシア語の言語の違いである。相手の
言語が分かる場合、「カップルの会話をうまくコントロールできて、
他の人とコミュニケーションできる」(p.111)。他方、お互いの言
語能力が不十分であれば、相互理解が妨げられる。

上記の二～四章では、男女のお互いの期待と現実、海外（アメリ
カ）での生活のイメージと実態がどのように違うのか述べてある。

そして、それに基づいて発生するカップルのコンフリクトにも触れている。これらは期待される役割の問題及び経済的な依存の問題であると考えられる。これらは、重要な点であるため、後に再び言及したい。

第五章「For Better or For Worse (よかれあしかれ)」、第六章「The Mindset (物の見方)」は、主にカップルの価値観の相違に注目している。次の第七章「Love and Marriage Do-Don't (恋愛と結婚ドットコム)」には、デート・エージェンシーやインターネットを通して知り合い、結婚した人々の物語が集められている。

「Parents and Children (親子)」という第八章には、子どもがいる女性(時には、男性)が再婚する場合、その子どももの育て方に関してどのようなコンフリクトが発生するかについて述べてある。

最後の「The Culture Conflict (文化的コンフリクト)」という第九章には、ロシアとアメリカの間にある根深い文化的差異が述べてある。その中で、第一に挙げられているのは言語であるが、言語の違いだけではなく、宗教、ステレオタイプ、ドメスティック・バイオレンス等のような問題に関する双方の考え方の相違について述べてある。

このように、本書にはロシアとアメリカに居住するロシア人・アメリカ人結婚カップルが抱える問題が様々な側面から描かれている。特に、本書で挙げられている事例からは、ロシア人女性の国際結婚をめぐる興味深い問題点が見て取れ、その点は国際結婚を研究する上で、重要な論点になると思われる。評者の観点から、そこで最も

重要だと思われるのは、国際結婚における経済的な依存の問題である。まず、本書の内容に基づくところ、国際結婚をするロシア人女性と外国人男性のカップルには、女性の経済的な依存があり、それに基づくコンフリクトが発生する。経済的な依存が生み出す問題について、本書の記述を見ていこう。

第一に、外国人と結婚し外国に居住するロシア人女性は、その国の女性と比べ、経済的に傷つきやすくなる。ロシア人女性の中でも、特に言語能力と教育レベルが低く、仕事を見つけての不利な女性は、自由に使えるお金が少なくなる。例えば、アメリカ人男性と結婚したロシア人女性の一人は、一九八〇年代にアメリカに来たばかりの時に、現金五十ドルしか持っていなかった。そして、すぐに仕事が見つかるわけではないため、夫からもらう小遣いに頼らないといけないかった。

第二に、経済的な依存はドメスティック・バイオレンスとつながる。本書で登場するロシア人妻の一人は、アメリカ人夫に英語の勉強をやめさせられ、仕事に就けなかった。それによって、その女性は夫に経済的に依存するようになり、彼からの暴力を我慢するしかなかった。子ども二人を出産したその女性は、お金と英語の能力もなく、夫からの暴力を妊娠している時も避けることができなかった。

第三に、経済的に男性に依存している女性は精神的に不安を感じ、自尊心が低くなるため、精神的にも男性に依存するようになる。例えば、あるロシア人女性は、お金と英語の能力がなく、アメリカ人夫に全て頼らないといけなかったため、孤独とストレスを感じてい

た。そこで、理由もなく、夫とけんかをし続けることになった。

以上述べたことから、経済的な依存が、言語の能力、教育や精神的な不安といった要因とも複雑に絡み合っていることが分かる。

これらの問題は最近の調査でも指摘されているところである。例えば、コラブリョヴァ他 (Korablyova et al. 2005) が実行したロシアの国際結婚エージェンシーのインタビュー調査によると、現在、国際結婚をしたいロシア人女性の多くは、国際結婚をする理由として、経済的な側面の改善を挙げている。彼女達の多くは賢く、きれいで、教育レベルが高い。しかし、言語等の環境に不慣れであるため、就職の機会に恵まれず、経済的に男性に依存することになり、種々の問題を抱えることが予測される。

このように、本書は、冷戦後のロシア人の国際結婚について、貴重なケース・スタディになっているといえるだろう。しかし、気になる点がある。それはロシア人女性に期待される役割の問題である。本書では、ロシア人女性の魅力が女らしさ (femininity) であるということが全体にわたってたびたび挙げられている。「このような非常に女らしい女性は、アメリカでは絶滅しそうであるため、アメリカ人男性にとって魅力的である」(p.25) とう。本書で挙げられている例はほとんどそうである。しかし、実際のロシア人女性は、それほど女らしくない。

本書でも述べられているように、ソ連邦ではロシア革命、第二次世界大戦等によって、ロシア人(特に、男性)は四千万人も死亡した。そして、本書のデータによれば、一九九五年に各十人の女性に

対し九人の男性しかいない。ゆえに、ソ連では第二次世界大戦後の世代は、ほとんど男性なしで女性の手によって育てられた。また、ソ連崩壊後のロシアでの経済的な問題によって、様々な困難な状況が生じたため、それらを乗り越えられる女性が育った。他方、男性はというと、経済的に弱くなった。著者自身、「ロシア人男性は自分の妻と子ども達に責任感を失っている感じがする。彼らは仕事を維持できなく、給料を飲み干す」(p.210)と述べる。つまり、このような状況では、ロシア人女性は、男性に頼ることができないため、強くならざるを得ない。

実際、本書ではアメリカ人男性との関係であられるロシア人女性の強さに関し、次の例が挙げられている。あるアメリカ人男性は、ロシア人妻が自分を子どものように扱っているという。別の男性も、ロシア人女性のフィアンセに、「私は本当の男性を求める。しかし、あなたは子どもだ」(p.239)と言われた。結局、このような女性は自分の夫より精神的に強いと指摘されている。

以上述べたように、ソ連又はロシアの女性達は、強い女性に囲まれて育ったため、精神的に自立しており、それほど女らしいわけではない。それゆえに、男性支配的な社会の男性と結婚した後、どのようなコンフリクトに遭うのだろうかという問題は興味深い。

しかし、本書ではアメリカ人夫とロシア人妻のカップルのコミュニケーションにあらわれるロシア人女性の精神的な強さが描かれていながら、ロシア人女性がそれをどのように経験しているのかに関する検討が不十分である。また、その女性達の強さは家庭内や職

場においてどのような意味を持つのかについての検討も本書では不十分である。今後、このような問題を含めて、国際結婚の研究を行っていく必要があるだろう。

日本でも、近年 CIS 出身女性と日本人男性の国際結婚の数が増え続けているため、本書は導きの糸となる。日本人と結婚するロシア女性の多くは言語の問題を抱えていることが考えられるため、それに従って、女性の経済的な依存の問題がより強くあらわれるかもしれない。また、外国人女性は、たとえ言語的に優れていたとしても、日本の就職環境を考えた際に、就職が難しくなることは容易に予測できる。そして、日本人男性とロシア人女性の結婚カップルは、多くの文化的な相違があり、それに基づく問題も発生すると考えられる。しかも、アメリカと異なり、移民に厳しい日本において、ロシア人女性が適応しにくいことも考えられる。

評者のこれまでの調査によれば、日本人男性と結婚するロシア人女性の多くはホステスである。日本語が不得意で、生活の様々な面で苦労している。また、言語的な問題によって、就職の機会が少なくなる。たとえ日本語が上手だとしても、アルバイトのような就業形態になる。ゆえに、日本人夫に経済的に依存するようになる。それに加えて、離婚をする場合、離婚後の子どもの引き取りに関して、日本の法律環境によって、子どもを引き取ることがむずかしいのが現状である。

いずれにしろ、本書は、冷戦後のロシア社会の国際化とその帰結である国際結婚の研究について、重要な貢献であるといえるだろう。

それは、今後、ますます増加してくるであろう CIS の移民や国際結婚の研究にとって出発点になるはずである。

〈注〉

- (1) 「婚約ビザ (francé visa)」とは、アメリカの国籍以外の人々がアメリカ人との結婚を目的に入国を許可されるビザである。結婚式は、入国日より九〇日以内に行わなければならない。United States Immigration Support http://www.usimmigrationsupport.org/visa_k1.html (アクセス: 2007.10.26)

【参考文献】

- Kazakhstan Today, 2003.02.10, Za Poslednyuyu Dekadu 2002 Goda s Territorii Byvshego SSSR po Vizam Nevest Vyekhali v SSha 75 Tsyach Zhenishin, *Demoscope* #103-104, 2003.03.03-16 <http://demoscope.ru/weekly/2003/0103/panorn01.php#1> (アクセス: 2007.10.25)
- Korablyova G. B., Antonova N. L., Gerasimova M.B. Klientki Brachnogo Agentstva: Shriki k Portretu, *Sotsiologicheskie Issledovaniya* 11, 2005, p142-144
- RIA Novosti, 2007.01.12, Moskvu Okhvatil Bum Razvodov, *Demoscope* #273-274, 2007.01.22-02.04 <http://www.demoscope.ru/weekly/2007/0273/frossia01.php> (アクセス: 2007.10.25)